

念論文集で、無名の一學者の論文から出所も明らかにしてない所得データを引用して消費函数を計算したことなどはその一例となろう。しかしこの書物の真髓は極めて秀れた高度の理論的直観にある。

アメリカの消費函数論争の一成果として、L. R. Klein, “*Economic Fluctuations in the United States, 1921—41*” をこれに對比するとき、人はハアヴァード色濃厚な Duesenberry とシカゴ色（あるいは Cowles Commission 色）で包まれている Klein との對稱性に印象づけられるにちがいない。輝かしい最新の metrics の装いをした Klein の研究と、そのような装いはないが、しかし Keynesian, Woytinsky の論争を或る意味で止揚し、さらに Veblen 的な消費者行動の想念を始めて理論化した Duesenberry の高度の獨創性。前者は依然として Keynesian たることを持し、消費函数を含む一そう廣汎な Model Building へと進んで行くに對し、後者は widening よりはむしろ deepening の過程を進ることによっていつしか Keynes を超えてしまった感が

ある。

恐らく Duesenberry は微視的分析を現實化することによって始めて微視的領域と巨視的領域とを結びつけたところの最初の學者の一人として注目されてよい。そして消費函数論争においても、Klein, Woytinsky, Modigliani などとともにその業績を稱えられて然るべき一人だと思われる。私見によればその中でも最高の地位を得るに値する人である。

わが高田博士は「理論經濟學」Vol. 1, No. 3 において、「效用は各物資の數量のみの函数でなく、所有の相對量の函数である」と論破され、さらに「……效用函数自體の構造變革……は資本主義の生産機構についてマルクスが開拓した分野にも匹敵する分野である」と説かれた。以上の言を吐かれる高田博士は、恐らく日本の經濟學者のなかでも、一ばん Duesenberry を深く理解しうる一人であるまいか。書評を終えるに當って、私はたまたま博士の「厚生經濟學の前提」の一節を想起せざるを得なかった。

ヤー・アー・クロンロード

『ソヴェート連邦における貨幣流通の強化と資本主義諸國におけるインフレーション』

Академия Наук СССР—Институт Экономики. Я. А. Кронрод, «Укрепление денежного обращения в СССР, инфляция в странах капитализма.» Государственное Издательство Политической Литературы. 1950. стр. 190. 2р. 50 к.

野々村一雄

第2次世界大戦以後、戦後處理的な通貨・物價改革は、ソ連邦においては、今日まで4回にわたっておこなわれている。（第1回、1947年12月。第2回、1949年3月。第3回、1950年3月。第4回、1951年3月。）ソ連邦における價格形成・その體系と變動について、また、ソ連邦の通貨については、従來においても、多くの論議がある。戦後の通貨・物價措置について、外國においてはソ連邦のそれとは異った評價がなされてきたこともまた、周知の事實である。

いまわたくしがここに取上げようとするクロンロードの新著の第1篇は、このような状況の中でソ連邦から出

された、この領域における最初の、まとまった、文獻を提供している。本書は、「1947年の通貨改革とそれに續くソ連邦貨幣流通の強化を特徴づける具體的資料に基づき、資本主義的貨幣制度に對するソ連邦貨幣制度の優越性を示すこと」をその課題として¹⁾、1950年3月の第3次措置の數カ月後²⁾、すなわち、戦後におけるソ連邦の

1) Я. Кронрод, Укрепление денежного обращения в СССР, инфляция в странах капитализма. стр. 5.—以下、本書の引用は、本文中に註記する。

2) Н. Гродко, О книге Я. А. Кронрода «Укрепление денежного обращения в СССР, инфляция в

通貨・物價措置の基本的方向やその國民經濟への影響が、その大綱においては充分判定しうるものとなった時期に、市場へ送られている。本書第1篇における分析の焦點や基本的な資料は、上に引用したように、1947年の第1次改革におかれている。

本書全體の内容目次は次の如くである。——

序 言

第1篇 大祖國戰爭後のソ連邦における貨幣流通の強化

第1章 社會主義經濟における貨幣および貨幣流通の役割

第2章 大祖國戰爭期のソ連邦における貨幣流通

第3章 1947年のソヴェート貨幣改革

第4章 完全な價值を持つソヴェート・ルーブル полноценный советский рубль とソ連 の戦後の經濟的發展

第5章 完全な價值を持つソヴェート・ルーブルと ソヴェート國民の物質的福祉の増大

第6章 ルーブル相場の金基礎への移行とルーブル の對外爲替相場の引上

第2篇 第2次世界大戰後の資本主義諸國におけるインフレーションの強化

第1章 資本主義の一般的危機期における資本主義 諸國の貨幣流通の深刻なる混亂

第2章 インフレーションは戦費を勤勞大衆の肩に 轉嫁するための獨占資本の道具である

第3章 戦後におけるインフレーションの強化は資 本主義の一般的危機の尖鋭化の現象の一 つである

第4章 1949年における平價切り下げ девальва- ция валют はインフレーション強化の 新しい段階である

著者は、その「序言」において、戦後における社會主義經濟と資本主義經濟との對蹠的な發展・衰頹傾向を指摘しつつ「貨幣制度の狀態、通貨事情は、全體としての經濟狀態によって決定される。」(6頁)と述べ、ついでその第1篇において、戦後のソ連邦における貨幣流通・通貨改革の分析を行なっている。以下、わたくしは、この第1篇を中心として本書の内容を吟味したい。

著者は、本書第1篇 第1章において、まず、ソヴェート貨幣の本質および機能についての説明から始める。この章の敘述には、他のソヴェート貨幣理論家の所説と

странах капитализма», «Вопросы Экономики», No. 12 1950 г., стр. 101.

比較して、とりたてて目新しい點は何等看取されえない。雑誌『經濟學の諸問題』のために本書の書評を書いたグロトコ Н. Гродко は、この章における、ソヴェート貨幣の役割についての説明を「忽率な」ものといひ、ソヴェート貨幣の本質についての説明を、「抽象的な」「意味のわからない」、變容された價值法則問題との關連を持たないところの、定義だとしてくさしつけている³⁾。この點についてのグロトコの本書からの引用の仕方や批判は充分にわれわれを納得させうるものではないが、著者の本章の説明もまた、このような酷評をうけてもいい底のものである。わたくしはここではただ、この理論的な序章が理論的な明確さを欠き、敘述は混沌としていることを、いっておけば足りる。

第2章において著者は、第2次大戰時のソ連邦にはインフレーションは存在しなかったと主張している。すなわち、本書の30—31頁に次の如き箇所が見出される。——「ソ連邦においては社會主義的國民經濟制度のおかげでインフレーション инфляция はありえなかったし、また、事實なかつたのである。資本主義諸國家においては深刻なインフレーションが起つた。……ソ連邦の通貨改革を見て、ブルジョア經濟學者達がソ連邦における『インフレーション』の徴候を見出そうと努力したことは、偶然ではない。彼等は、ソ連邦經濟もまた、資本主義經濟が悩んでいるとおなじ不愉快な疾患——インフレーション——を免れないであろうということを期待した。しかしこれはわが國に對する詐欺的な誹謗である。本質上、資本主義世界に固有の一定の階級關係を表現しているインフレーションという範疇は、社會主義經濟には絶対に適用されないのである。」

かかる見解は、ソ連邦の公式の見解である。1947年12月14日附の「通貨改革の實施ならびに食料品工業製品の切符制廢止に關するソ連邦大臣會議および全ソ連邦共産黨(ポリシェヴィキ)中央委員會の決定」においても、また、たとえば、1948年度スターリン賞受賞作品たる、ヴォズネSENSキー著『大祖國戰爭期におけるソ連邦の經濟』(1947年) Н. А. Вознесенский, «Военная экономика СССР в период отечественной войны.» Госполитиздат. 1947. においても、第2次大戰時のソヴェート經濟についてインフレーションを指摘せず、1947年における通貨改革を1922—24年の通貨改革とは本質的に異なるものとして把握している。著者はかかる公認の見解を繼承したにすぎない。

この點は、きわめて重要な點であり、したがって、こ

3) Н. Гродко, там же, стр. 100.

の點についての理解が1947年以後の4次にわたるソ連邦通貨改革に對するソヴェートの理解のために要點となるべきものであるが、外國側の見解とは必ずしも相容れない。實例を手近にある日本の雑誌から拾ってみても、たとえば、ソ連研究者として有名な副島種典氏は、『經濟評論』誌上の氏の論文の中で、1947年暮の通貨改革が「戦時中に發生したインフレーションに終止符をうった……」と述べ、第2次世界大戦期のソ連邦インフレーションを認めておられる⁴⁾。日本銀行調査局の尾崎晃平氏は、「戦時中の物價は、歴大な軍事費を主因としてコルホーズ市場價格を中心に激しいインフレーションを現出していたことはいうまでもない。」と述べ、それについて、「1938年のソ連の通貨發行額が1629億とすれば戦争末期には少くとも4000億ルーブルを越えていたであろうことと、コルホーズ市場價格が配給價格の10-20倍に及び、物によっては50倍以上に上っていたこと」を註記しておられる⁵⁾。この種の理解はおそらく、(日本以外の)ソ連圏外の多くの文獻をとってみても、きわめて普通のことであろう。

わたくしは、この點についての實質的な議論には、ここで立ち入らない。ここではただ、次のことを指摘しておきたい。——クロノロードその人のこのような意見は、第3章において、著者が1947年の通貨改革の本質を判定する場合に、1947年のそれが1922-24年のそれと本質的に相違し、餘剩貨幣の流通からの排除にとどまると述べていることと、必然的につながっているのである。したがって、ソ連邦における戦時インフレーションの缺如という命題は、本書においてきわめて重要な主張となっているのである。この點について、われわれを納得せしめうるだけの、充分な説明は、第2章に見出されえない。著者は、ただ、大臣會議および共産黨中央委員會の決定を頂點とするソ連邦の公式的見解を忠實にくりかえすにとどまっている。しかしながら、經濟學者の任務は指導的な政治當局の公式聲明をそのままくりかえすだけにとどまるものであろうか。

著者のこのような態度は少くとも本書第1篇全部に貫かれている。本書を手きびしく批判したグロトコが、「事實の敘述に關しては本書には文句をつけうることは少ない。」といっている⁶⁾のは、わたくしには巧まざる皮肉にひびくのである。公式文書から拾われた數字と事實とに

對しては、「文句をつけうることは少ない。」《книга вызывает мало замечаний.》と言わざるを得ないであろう。

第3章において著者は、まず1947年の通貨改革を特徴づける。著者の特徴づけはさきにあげた『決定』と同一趣旨である。著者によれば、1947年のソヴェート經濟そのものが、1922-24年の幣制改革當時のような過渡的な經濟、諸ウクライドの並列的複合體ではなくて、國の經濟が完全に社會主義化された經濟である點において、1947年12月の通貨改革は、單なる餘剩貨幣の整理でありえたのであり、根本的なインフレーション對策としての1922-24年の幣制改革と本質的に相違している、という。かくして、1947年の通貨改革の特質は、餘剩貨幣の流通からの排除により、切符制廢止の際の商品流通、すなわち「公開ソヴェート商業」への移行の際における餘剩貨幣占有者の投機的利得の可能性を排除するにあった、とされる。著者はついで、その國民經濟に與えた効果を敘述する。——戦時經濟下における賃金均等化傾向と獨立採算制の弱體化とは餘剩貨幣の清算によって止揚され、通貨改革は勞働生産性を昂揚せしめ、商業・配給部門から工業、特に重工業部門への勞働力流入を結果し、それらの結果としてソヴェート經濟の發展テンポそのものを増大した、という。

ここで問題となるのは、1947年の幣制改革によって、工業勞働者・俸給生活者に比してコルホーズ農民の財産および所得が減價・減少したと考えられるにもかかわらず、しかも工業、特に重工業部面への勞働力流入が指摘されているにもかかわらず、著者が、何等の説明もなしに農業における生産の増大と生産性の向上とを指摘している點である。著者はこの間の事情について説明らしい説明は何等おこなっていない。しかし、農業生産増大、生産性提高の刺激はどこからくるのか。1947年の通貨・物價改革は、そのものとしては、農業生産に對しては否定的な刺激のように思われるのである。第1次的な資料を持たず、直接的な見聞をもたないわれわれとしては、この點の説明こそ望ましいものである。副島種典氏も、さきにわたくしが引用した論文の中で、この問題に言及し、「ここに一つの大きな問題がある。」ことを指摘され⁷⁾つつ、フルシチョーフの演説の中から、一つの解説をひき出しておられる⁸⁾。副島氏の解説は、1947年の措置がコルホーズ農民に不利なことを認めつつ、零細コルホーズの統合およびそれに対する國家および黨の援助という要

4) 副島種典「ソヴェート經濟の新たな發展」『經濟評論』1950年6月號 61頁

5) 尾崎晃平「戦後におけるソ連物價の動向」『世界經濟』1951年7月號 24頁

6) Н. Гродко, там же, стр. 99.

7) 副島種典 前掲論文 67頁

8) 副島種典 前掲論文 67-68頁

因を解明要因としている。これだけでは、言うまでもなく不十分な説明である⁹⁾。こういう點こそわれわれはソヴェート經濟學者から説明をききたいのである。だが、著者は、本書の該當部分で、進んだ農業機械の採用の事實を事のついでにあげているにすぎない。本章を読みおわって、わたくしの讀後感は、甚だすっきりしないものがある。そういう意味では 1922—24 年の幣制改革をとり扱ったアトラスの書物¹⁰⁾よりも、遙かにあっけないものである。それは 1947 年のソヴェート經濟が社會主義的に單一化された經濟だから複雑な説明をすべき何物もないといったり、數字の發表上の困難をいうのでは辯解がつかないところの、著者自身の未熟さの故であろう。

以上のわたくしの評言は、通貨改革後のソヴェート經濟の發展を述べた第 4 章についても、改革が國民の福祉に及ぼした影響を述べた第 5 章についても、同様に、あてはまる。第 6 章は表題のテーマを取扱ったあとで、(86 頁以下において、) 東歐諸國における戦後經濟および通貨措置を略述している。もはや紙數もつきたので細目に

9) 言うまでもないことであるが、私は副島氏に不満を述べているのではない。説明のための十分なデータが缺けていることを言っているだけである。——以上念のため。

10) З. В. Атлас. Очерки по истории денежного обращения в СССР (1917-1925). Госфиниздат, 1940. (邦譯ゼー・ヴェ・アトラス『ソ連邦貨幣流通史研究』東亞研究所 1943 年 8 月)

はたちらない。わたくしがさきに挙げたグロトコの書評は、貨幣論および爲替理論上の興味ある諸問題を提起しているが、ここで、くりかえす必要も餘白もない。ただ、わたくしの書評の結びにかえて、彼の書評の結びの言葉を、以下に、譯しておく。——「重要なテーマの解明において著者は多くの理論的誤謬や混亂に道を空けた。それ故にこそ、わが國の讀者は本書に不満であり、ソヴェートの經濟學者達が、マルクス・レーニン主義理論にもとずいて……ソ連邦における貨幣流通の諸問題の全面的解明を與えているところの、新しい勞作を發表することを期待しているのである。」¹¹⁾

この評句は、大體において、そのまま、わたくしの書評の結尾にしてもいい。ただ、われわれソ連圏外のソヴェート經濟研究者にとって、本書は、ソ連邦外の文獻では與えられない第 1 次的なデータの供給源としての意義を持っている。現在のソ連邦文獻における「ほとんど完全に近い數字の燈火管制」(シュワルツ)¹²⁾にもかかわらず、「本書の中には多くの實際的統計的資料が利用されている。」(グロトコ)¹³⁾からである。

1951.8.15.

11) Н. Гродко, там же, стр. 105

12) Harry Schwartz, On the Use of Soviet Statistics, *The Journal of American Statistical Association*, Vol. 42, No 239, Sept. 1947, p. 401.

13) Н. Гродко, там же, стр. 99.

チャブキン編

『チェコスロヴァキアの

第一次經濟發展五年計畫』

—Первый пятилетний план развития народного хозяйства Чехословакии, Перевод с чешского Р. П. Разумовой, Предисловие Н. К. Тяпкина, 1950 Москва.

岡

稔

I

東ヨーロッパ諸國が資本主義の陣營を去って、社會主義の建設に向ってからすでに 6 年あまりの期間が経過した。その間、これらの諸國においては、1917 年以降のソヴェート・ロシアに生じたのと本質的に同一の變化が生じ、本質的に同一の經濟的發展が行われてきた。したがって

資本主義から社會主義への移行に関する人類の歴史的經驗は以前に比べてはるかに豊富になったのであり、このことは社會主義經濟學あるいは計畫經濟論にとってきわめて重要なことである。すなわち、我々は種々異った環境の下における社會主義建設の經驗を相互に比較することができるようになったし、また社會主義國相互の關係(社會主義的國際經濟)という全く新しい問題領域が開